

北海道哲学会『哲学年報』65号（2019年）抜刷

客観的な規範に従って生きることは  
人生の意味を奪うのか

蔵 田 伸 雄

《シンポジウム—人生の意味—》

# 客観的な規範に従って生きることは 人生の意味を奪うのか

歳 田 伸 雄

（北海道大学）

## 問題設定

道徳的に生きようとするなら、あるいは客観的な規範に従って生きようとするなら「人生の意味」が奪われることになるのだろうか。嘘はつかず、困った人がいれば助け、慈善事業を行い、不幸な人を減らそうと努め、人がいやがる仕事を引き受け、様々な社会的なリスクを減らすことに努める。しかしこうした生き方をしようとするなら、自分の幸福や快楽や欲求の満足を犠牲にすることになり、「人生の意味」が奪われたように感じられるかもしれない。だが「人生の意味」についてある種の解釈（客観説的な解釈）を採用するなら、この問いに対して否定的に答えることができる。

カント主義的倫理学や規則功利主義では、道徳的に行為することとは、客観的・普遍的な規範に<sup>(1)</sup>従うことだと考えられている。だがカント主義や功利主義では道徳的に行為する際には、自分の快楽や幸福の追求は行為の直接的な目的としては否定されることになる。つまり道徳的に生きようとするなら、自分の快楽をひたすら追求する生や、自己の欲求の実現をあきらめなければならないことになる。そのため「道徳的に」生きようとするなら、少なくとも部分的には「人生の意味」が失われることになると感じられるかもしれない。「人生の意味」を感じさせるものは、何らかの喜びや快楽であり「道徳的に行為する」ならそのような喜びや快楽をあきらめることになると思われるからである。

確かに人生の意味を与えてくれるものが低次の快樂だと考えるなら、客観的な規範に従って生きることによって人生の意味は奪われるように思われるかもしれない。しかし客観的な規範に従って生きることによって、人生の充実感を得ることもできる。だが道徳的に生きようとすることによって、別の意味で人生の意味が失われたように感じられるかもしれない。本稿ではこのような過程の概要を描きたい。

## 1. いくつかの例

「客観的な規範」に従って生きようとすることによって人生の意味が奪われてしまうように感じられるケースのいくつかをあげてみよう。

例1) 快樂のあきらめ：人生の意味は享樂的な生を生きることにあると考えている人が、道徳的に（「まじめに」）生きようとして心を入れ替えるなら快樂の追求をあきらめなければならないことになる。ギャンブルや喧嘩と、性的快樂の追求に喜びと生きる意味を見いだしていた人は、ギャンブルをしてはならない、暴力を振るってはならない、性的パートナーは1人にしておくべきだ、といった規範に従うことによって、「人生の意味」が奪われたように感じられるかもしれない。

例2) 功利主義者のささやかなぜいたくのあきらめ（あるいは功利主義の強すぎる要求）：功利主義を真摯に受け止め、常に世界全体の幸福と福利の向上を考えながら生きるなら、自分の幸福や快樂をあきらめなければならないことになる。少し広めの家、たまのぜいたくな食事、好きなアーティストのコンサート、家族や恋人との海外旅行、新しい自動車といったものをあきらめて、その分のお金をユニセフや「国境なき医師団」等の慈善団体に寄付すれば、多くの途上国の人の生命を救うことができる。誠実な功利主義者として生きようとするなら、自分の給与の少なからぬ額をこのような活動に寄付するべきであり、それによって少なからぬ自

分の欲求をあきらめなければならないということになる。このように、功利原理の要求はかなり強い<sup>(2)</sup>。このような生を〈意味のある生〉と考える功利主義者の代表はピーター・シンガーである<sup>(3)</sup>。

例3) 自己犠牲にもとづく自分の夢のあきらめ：自己犠牲的な女性が自分の配偶者や子どものために、あるいは親や祖父母の介護のために身を粉にして働くことで一生を終えたとする。彼女にはかつては画家になりたいという夢があり、若い頃は作品も描いていてそこに人生の意味を見いだしていた。彼女は家事や子育てや介護をしなければならないという規範に従うことで、「人生の意味」を奪われたと感じるかもしれない。

例4) 信仰のあきらめ：自分が信仰する宗教のための活動に人生の意味を見いだしてはいるが、自分が信仰する「神」は存在しないのではないかと疑っている人がいるとしよう。そのような人が「自己欺瞞は許されない」という規範に従い、自己の信仰を捨てるなら、その人は自分の人生の意味が奪われたように思うかもしれない<sup>(4)</sup>。

例5) ある種の人生計画のあきらめ：ある人が何らかの創作活動を行うことに人生の意味を見いだしているが、そのような創作活動を続けるなら、自分の家族の生活を維持することができないとしよう。その人が、「自分の家族を養わなければならない」という規範に従って、作品をつくらんとする人生設計を捨てるなら、やはりそこで人生の意味が奪われたように感じられるだろう<sup>(5)</sup>。

例6) 評価されない活動のあきらめ：グスタフ（仮名）は交響曲を作曲することに「人生の意味」を見いだしている。しかし彼の交響曲は誰にも評価されない。しかしグスタフは指揮者としては人気がある。グスタフが自分が作曲した交響曲を演奏しても誰も喜ばないが、彼がモーツァルトを

指揮すれば、聴衆は喜んでくれる。「世界の幸福を増やすべきだ」という客観的な規範に従うなら、グスタフは人々に喜びを与えるため、そして家族を喜ばせるために作曲をあきらめ、指揮に専念するべきだということになる。しかしグスタフはそのような自分の人生に十分な「意味」を感じるができない。

例7) 社会的に有意義な活動のための自分の夢をあきらめ(自分の人生に倦んだマザー・テレサ): テレサ(仮名)は強い信仰をもち、貧しい病人を救うための事業に自己犠牲的に邁進し、ホスピスをつくり、多くの病人の苦痛をやわらげた。彼女は自分が世界に貢献していることがわかっていて、自分の活動にやりがいも満足も感じている。しかし彼女は自分の人生にやり残したことがあると感じていて、自分の活動が退屈だと感じている<sup>6)</sup>。

人生の意味についての悩みは「贅沢な悩み」だと思われることもあるだろう。「人生の意味」に関する疑問とは、生活に不安のない甘やかされた若者や、暇をもてあました専業主婦や、それなりに社会的な地位を得た中年男女の愚痴の表明でしかないのではないか。日々の糧を得るのに必死で、それが目的となっているような生活を送る人には、「人生の意味」について考える暇などないのではないか。それなりに豊かになり、生きることを目的として働く必要がなくなり、暇をもてあまして初めて人は「自分は何のために生きているのか」と考えるようになるのではないか。自分の「人生の意味」がわからないという悩みは、「生きるために働く」ことから解放され、それなりに暇をもてあました先進国の中流階級以上の人々の贅沢な悩みなのではないだろうか<sup>7)</sup>。しかし「人生の意味」に関する問いは逆境にある人や生の危機にある人からも発せられる。「人生の意味」に関する多くの議論の源流は強制収容所の壮絶な状況からの生還の経験にもとづくヴィクトール・フランクルの思想にある。また死を目前にした人も自分の「人生の意味」を考えるであろう。あるいは疎外された

状況にある労働者も自分の「人生の意味」とは何かを考えるであろう。本稿では「人生の意味」に関する問いを、このような観点からも考えたい。

## 2. 「人生の意味」の多義性

「人生の意味」は少なくとも「快樂」や「幸福」とは異なるカテゴリーであると言ってよいだろうが、それは多義的な概念でもある。自分が生きていることの「充実感」や、日々の労働によって得られる「満足感」も、神から与えられた「使命」も、「人生の長期的な目的」も（例えばそれは住宅ローンを完済することであってもよい）、家族や友人との交流も、共同体や国家や組織への「貢献」や社会運動の一部であることの満足感も、「人生の意味」という語で一括される。「人生の意味」とは未来に対しては「人生の目的」であり、過去については自分が行ってきたことであり、客観的には世界への貢献、主観的にはある種の満足であるとまとめることもできるだろう。

そして「人生の意味」は辞書を調べればわかる外国語の単語の意味のように、何かの本を調べたり、識者（賢者）に尋ねたりすればわかるものだと理解されることもある（ヒマラヤの賢者に人生の意味を尋ねれば、「人生とはこれ泉なり」と答えてくれるのかもしれない<sup>8)</sup>。しかしそれはベネターが指摘するように「カテゴリー・ミステイク」でしかない<sup>9)</sup>。「人生の意味」がわかるという体験と、わからない外国語の単語の意味がわかることとは多くの点で異なる。また「人生の意味」とは何か宗教的な真理のように、つまり「それがわかれば人生の悩みがすべて解決するもの」のように理解されていることも多いように思われるが、そもそもそのようなものがあるのだろうか。あるいは「人生の意味」とは「生きることの充実感」といった、感覚的なものであるのかもしれないし、世界に対して肯定的なある種の命題的態度の総称なのかもしれない。また自分が今まで生きてきた中で社会に対して行ってきた貢献の総体のことだと思われていることも多いだろう（「自分が生きてきたことの意味」と言われる場合の「意味」とはこのようなことである）。

このように「人生の意味」という語は多義的だが、およそこの語には以下の

ような用法があると考えられる。

- (1) 自分の人生が自分にとって意味があるという実感や充実感
- (2) 人生の意図、目的、計画
  - (2-a) 自分が設定した自分の人生の目的
  - (2-b) 神や運命が自分に与えた目的
- (3) 自分の人生の他者にとっての何らかの重要性
- (4) 自分の（人）生の原因や根拠
  - (4-a) 自分が生みだしている、あるいは生みだしてきた利益や効用
  - (4-b) 今まで自分が与えてきた社会への貢献
  - (4-a) 自分の人生が他人に与えることができる教訓

(→意味のある人生とは、他人に教訓を与えている人生)
  - (4-b) 自分が自分の人生から学ぶことができる教訓
- (7) 自分の（人）生の中にある何らかの内在的価値
- (8) それが理解できれば人生の全ての悩みが解消され、謎がすべて解けるよ  
うな根本原理

また(5)のように自分の行為を原因として世界に何らかの変化をもたらすことができることも、人生に意味を与える要素の一つになっていると言ってよいだろう。そして自分の行為が世界に対して何ら影響を与えることがないなら、自分の行為と人生に「意味」を見いだすことはできないかもしれない。電車の運転手が電車を運転しているとしても、実はその電車はAI（人工知能）によって制御されていて、彼がハンドルを動かしていても、実際に電車を動かしているのはAIであるとしよう。このような行為を繰り返す人生には「意味」を見いだせないかもしれない<sup>100</sup>。またどれほど社会に変化をもたらすような行為であるとしても、それが自分以外の他者にも行えるようなことであれば、人はそのような行為に大きな「意味」を見いだすことはできないかもしれない。このように人が自分の行為に「意味」（自分にとっての重要性）を見出すためには、

「自分が変化の原因である」という感覚が必要だが、(5)はこのような要素を含んでいるという前提のもとで、この後の考察を続ける。

### 3. 主観説と客観説についての確認

ここで「人生の意味」に関する議論で言及されることの多い、客観説と主観説との区別について説明しておこう。

「人生の意味」に関する議論で例として出されることが多いのはカミュも扱っている「シーシュポスの神話」である<sup>60</sup>。シーシュポスは神を欺いた罰として、大きな岩を山上に持ち上げ、山上に持ち上げたところでその岩が自重で山の下に転がり落ち、そのためシーシュポスは再び山上に岩を持ち上げるということを無限に続けなければならない。このようなシーシュポスの生は何も生み出さず、苦痛に満ちている。当然シーシュポスは自分の現状を肯定できず、自分の存在に重要性を感じることができない。そしてシーシュポスの人生には目的もない。シーシュポスの生は岩を持ち上げてはそれが落ちるのを眺めることを繰り返すだけで、彼が行ってきたこと・行っていること・これから行うことは世界に何の変化ももたらさない。このような「シーシュポス的な生」は「意味」のない生の典型だということになる<sup>61</sup>。

このようなシーシュポスの神話を素材とした「人生の意味」に関する議論を整理する際に手がかかりとされることが多いのは、メッツ等が用いる「主観説」（「人生の意味」は心-依存性 mind dependent である）と「客観説」（「人生の意味」は心から独立した mind independent ものである）との区別である。主観説の代表者とされることが多いのが R. テイラー等であり、客観説の代表者とされることが多いのはピーター・シンガー等である。

岩を持ち上げ続けたいという衝動が神によって、あるいは何らかの薬物によって、シーシュポスの心の中に植えつけられ、岩を持ち上げるという行為そのものにシーシュポスが喜びを見いだすことができるなら、シーシュポスは自分の行為には「意味」があると感じることになる（Taylor, p.323：これは用法(1)の充実感にあたる）。このような解決は主観説的な解決と呼ばれる。一方、



シーシュポスが永遠に岩を持ち上げ続けるとしても、岩が転がり落ちることなく、毎回異なる岩をもちあげ、それらの岩によって壮麗な神殿をつくることができるなら、シーシュポスの行為には「意味」があることになる。これは客観説的な解決である (ibid)<sup>03</sup>。

サデウス・メッツ (Thadeus Metz) は「人生の意味」に関する膨大な数の英語圏の文献をサーベイした論文を次々と発表しているが、2013年にはその集大成とも言える *Meaning in Life* を出版している。メッツもそれらの文献の中でこの「主観説 / 客観説」の区別を用いている。メッツらの主張をもとに主観説と客観説の区別について説明すると、以下のようになる。

主観説：人生の「意味」は何らかの意味で主観的である（当人の心の中にあるか、心-依存的である）。人生の意味は自分の心の中の快樂、幸福、欲求の満足、目的の実現や主観的価値の増加にある。重要なのは本人が自分の人生をどのように感じるかということである。ある人が自分の一生を草原の葉を数えることに費やしたとしても、本人がそれに満足しているならそのような人生にも価値があるということになる。

客観説：人生の「意味」は何らかの意味で客観的である（当人の心の外にあるか、心から独立している）。人生の価値は具体的には自分の生み出す効用などの価値である。他人から見ても（あるいは「宇宙の観点」から見ても）意味があるような生でなければ自己の生に意味はなく、意味のある人生を送るためには他人の幸福のため、社会の中の価値を増やすために生きる必要がある。自分が何を成し遂げるのかが問題で、他人のためになることをすればするほど、また社会に貢献すればするほど自分の人生は意味のあるものになる<sup>04</sup>。

主観説の典型的な立場は、快樂を求める生に価値があるとするような立場である。しかしこのような立場に対しては、幸福な夢を見せてくれる「経験機械 (快樂機械)」<sup>05</sup>につながれている生も意味のある生になる、という批判がある。つまりどれほど快樂が得られ、当人が幸福だと感じているとしても、そのよう

な生には現実との接点がないから意味がないということになる。

一方客観説の問題点は世の中にどれほど大きな貢献をしたとしても、本人が自分の人生に「意味」(満足)を感じないなら、そのような人生には意味がない、ということにある。がんの特効薬を発見して世界に大きく貢献した医学研究者の人生は客観的には「意味がある (meaningful)」。しかし彼が医学研究を嫌っており、本当はプロのサクソ奏者になりたかったのだがその夢をあきらめたために自分の生に満足しておらず、自分の人生には意味がない、と感じているならそのような生には主観的には意味がない、ということになる。

#### 4. メタ倫理的な道徳的価値に関する議論を応用する

以上の問題をエイヤー以降の道徳的価値の实在に関するメタ倫理的な議論との関連で考えてみよう。道徳的価値については、それは「認識」される、あるいは「発見」されるものだとする立場 (認知主義) と、そのようなものではない (非認知主義) とする立場に分けることができる。さらに後者については、マッキーのように道徳的価値は「つくる」invent ものだとする立場もある<sup>69</sup>。

「人生の意味」を「人生の価値」と読み替え、「この人生を生きるに値するものとする価値」として理解するなら、人生の価値についてもそれを「発見」されるものとする認知主義的な立場とそうではないと考える非認知主義的な立場に分けることができる。後者は「人生の価値」についての表出主義的な解釈に結びつき、この立場では「この人生は生きるに値しない」あるいは「この人生は生きるに値する」といった言明は、認識の結果の報告ではなく、人生に関する何らかの情動や態度の表出だということになる。さらにこのような「人生の価値」に関する非認知主義的立場の中には「人生の価値」もいわばつくる (invent) ものだとする立場も可能である<sup>70</sup>。このような「人生の意味」に関する非認知主義的な立場は、「人生の意味」に関する問題を、人生は肯定できるかどうか、という「人生に対する態度」の問題に帰着させることになる。

さらにここには「人生の意味」に関する問題を「人生に対してどのような感情を持つべきか」という感情に関する問いとして考えるのか、それともそれを

「人生の意味」に関する認識（何らかの事実に関する真理）に関わる問いとして捉えるのか、という問題もある。

おおまかに言って、主観説は表出主義的な立場に、客観説は認知主義的な立場に対応すると考えてよいだろう。

## 5. 客観説は主観説も満足させる

本論での中心的な課題に戻ろう。道徳的に、つまり客観的規範に従って生きること、あるいは社会的貢献のために生きることによって自分の生の意味が奪われると思われる場合もある。道徳的な生を生きようとするのは、自分の欲求の充足と相容れないと思われることがあるからである（事例1）。例えば道徳的な生を生きようとするなら、You Tube でアイドルの動画を見続けることや、ネットゲームに延延興じることや、パチンコに興じることや、「ペリー・ロードン・シリーズ」<sup>88</sup>を全巻読破することをあきらめなければならないかもしれない。あるいは革命や社会貢献のために生きようとするなら、自分の欲望をあきらめなければならないだろう。

カント主義では行為が真に道徳的なものであるためには、行為を決定する際に主観的な欲求や満足を行為の最も強い決定原理としていてはならないと考えられており、そのため「道徳的に生きること」とは、道徳的な規範を行為の原理とすることであり、欲求や満足を行為の主要な決定原理とはしないことだと考えられている。カント的な道徳原則に従って生きるなら、自分の幸福の追求は道徳的に生きることのために犠牲にされる必要があるということになる（これは自然的な欲求と理性との乖離として意識されることもあるだろう）。少なくともカント倫理学の枠組みの中では、「〈幸福な〉生」と「道徳的な生」とが対比されて考えられることになる。

しかし客観的な規範（例えば「嘘をついてはならない」という規範）に従って生きたからといって、それだけで「生の意味」（この場合は自己の生に関する充実感）が奪われるということにはならない。確かに「人生の意味」に関する「主観説」の立場をとり、かつ自己の人生の意味を与えるものが欲求の満足

だとされるなら、道徳的な生を生きることによって人生の意味が失われることになる。確かに他者に貢献する生は「意味のある人生」であり、マザー・テレサのような多くの人を苦しみから救う生は「意味のある生」である。しかしそこで自分の快楽や欲求が犠牲にされるなら、そのような生は、「意味のない生」だと考えられることになる<sup>89</sup>。また道徳的な生を生きることによって、自己の主観性と客観的な規範（あるいは自己の行為によって産み出される効用や利益）とが乖離することになる。

だがこれは内的な観点から世界を見ているからであり、客観的 - 外的な視点から自己の行為を見るならば、自己の行為によって多くの人に利益を与えていることが明らかになる。

ピーター・シンガーはその著書『私たちはどのように生きるべきか』で以下のように言う。私たちはシーシュポスのように無限に生きるわけではない。私たちの時間は限られている。内面に向かうな。自己の外部に意味を見出せ。倫理的に生きることは、人生を意味あるものにする最上の方法である。自己を越えた「大義」のために生きよ。様々なやり方で「不正」に反対せよ。倫理的に生きることが人生に内容と価値を与える唯一の方法だとは言えないが、倫理的な生き方は一番しっかりした基礎をもった生き方である。「倫理的に生きる」とは人々の苦痛を減らすことであり、人々の権利を守り、戦争をなくし、途上国に援助をして環境を守り、動物の苦痛を減らすことである。このようなことは「宇宙の視点」から見れば豆粒ほどの前進でしかないかもしれない。しかし大きな目標のために生きるなら、退屈することも、人生に充実感を見いだせないということもない。そのように生きるなら、自分が生き、死んでいくことが意味のないことではなかったことがわかる<sup>90</sup>。

ピーター・シンガーのような功利主義者や一部のカント主義者にとっては、このような生き方を選ぶ転回（conversion）があるかどうかの問題となる。道徳的に生きる人にとっては「道徳的に一正しく」生きること（living right）が「よい」（Good）ことであり<sup>91</sup>、そのような生こそが真に「意味のある」人生だということになる<sup>92</sup>。

またこのような生は主観説的に考えても意味がある。倫理的に生きることによって人生の意味と充実感を得ている人がいることは疑う余地がない。主観説の立場で考えても、このような人はある程度満足している。

なお多くのカント主義者や、権利論者、また穏当な功利主義者は「道徳的に生きることで多少は自分の喜びをあきらめなければならないが、それは大したことではない」という立場をとっていると考えられる。この立場では、客観的な規範に従って道徳的に生きることによって、多少は「人生の意味」が失われることもあるかもしれないが、それは大した問題ではないと考えられている。確かに「客観的な規範に従って道徳的に生きる」ことを「最低限の社会的規範に従って生きること」（人に迷惑をかけずに生きること）として理解するなら、それほど多くのことをあきらめなくてもよいことになる<sup>83</sup>。

また徳倫理学者も基本的にはこのような立場をとるはずである。徳倫理的な説明をするなら、「他者に貢献する徳」を身につけることによって、慈善事業に寄付するといった行為に心から喜びを感じるようになるはずである。

## 6. 「人生の意味」の認識

前節でも見たような、「客観的な規範に従って生きることは〈人生の意味〉を奪う」という考えには多くの前提が伴われている。例えば「人生の意味とは個人的欲求の満足や、自己の欲求にある。つまり人生の意味とは感情であり、非・合理的なものである。また人生の価値とは非認知的な価値であり、〈人生の意味〉に関する発話内容（私の人生に意味がある・ない）は真偽帰属が不可能な自己の態度の表出に過ぎない。」このような前提である<sup>84</sup>。

しかし、人生の意味について認知主義的・合理主義的（あるいはカント主義的・または功利主義的）なアプローチをとるなら、客観的な規範に従って生きる場合、そこには客観的な「生きる意味」があるということになる。この場合の「生きる意味」とは自己の生がもつ、他者に利益を与えているという「性質」である（先に見た8つの用法で言えば(5)の「利益や効用や貢献」にあたる）。これは感情というよりもむしろ認識の対象となるものである。ここでは

「人生の意味」に関する問題は事実（この場合は他者に与える効用）に関する認識の問題だということになる。つまり「人生の意味」を理解するとは、世界の中のある種の要素（自分が他者に与えている効用に関する事実）を認識し、そのような要素を自分の〈信念と理由の体系〉の中に位置づけることだということになる。

そしてそのような要素は基本的に客観的・普遍的・非人称的・中立的なものであると言ってよい。このような要素は実践的な判断の一部となることによって、行為の動機づけを与え、また人生を肯定する根拠ともなりうる。「私は何をなすべきか」という問いは行為の実践的-客観的必然性に関する問いであるが、それは同時に自己の生に関する根拠への問いともなる。

このような思考の過程が困難なのは、先に述べたように〈客観的な視点〉に立ち、自分が他者に与える影響を理解することが必ずしも容易ではないことによる。私の見る世界は基本的には自分の視点から見る「世界」であり、そのような「世界」の中では、自分の行為が他者に与える客観的な影響を評価することは容易ではない。

## 7. 真剣な問への回答の回避、あるいは自己欺瞞か？

だが「人生の意味がわからない」とか言って親からもらった仕送りでごろごろしている暇があったら、ホームレス支援のボランティアでもやれ」といったシンガー的な客観説的な回答<sup>99</sup>は人生の意味に関する真の問い、つまり人生の無意味さ、あるいはニヒリズムや人生の不条理といった実存的な問題に真剣に答えていないのではないかと、という批判が考えられる<sup>100</sup>。あるいは「人生の意味」に関する問いという深い形而上学的な問いを、甘やかされたお坊ちゃん・お嬢ちゃんの愚痴めいた問いに矮小化しているという批判もあるだろう。つまり、常に客観的な規範に従って生きる生こそが「意味のある」生だとするような回答は、「人生の意味」に関する深刻なニヒリズム的問いへの回答を回避しており、「人生の意味」に関する問いを真剣に捉えていないということになる。人生の意味に関する問いとは自分もいつかは死ぬのであり、自分のしていること

は宇宙の中では何の意味もないという問いを含意していたのではないのか。社会貢献等に「人生の意味」を見出すことは、「人生の意味」に関する形而上学的な問いをずらすことでしかない。これは先にあげた8項目(11項目)の「人生の意味」の用法のうち、(4)の「自分の(人)生の原因や根拠」という用法を無視して、(3)の「自分の人生の他者にとっての何らかの重要性」と(5)の「自分が生みだしている、あるいは生みだしてきた利益や効用」、あるいは社会への貢献にしか着目していない、ということである。

またシンガーのように社会貢献をする生に「意味」を見出そうとするとき、あるいは「偉人のような生」を生きることが有意義だと考えるとき、そこにはある種の自己欺瞞がある、と考えることもできる。「道徳的に生きようとする」ことが、自分の個人的な人生の目的や人生計画をあきらめることにつながるかもしれないからである。

例2のように、誠実な功利主義者は自己の利益や選好を関係者全体の利益や幸福のためにあきらめることになる。このような功利主義的規範を自己の行為規範として採用することは、より多くの効用を生み出すために、自分の利益や人生設計をあきらめることを意味する。功利主義的な方針では、例えば自分が下手なマンガを描くことが好きであっても医師になって途上国の医療援助のために努力するべきであり、誰も読まないマンガを自分の喜びのために描き続けるといったことはあきらめるべきだということになる。だが「真の自己」に即して生きる(integrity)ことはある種の規範性を伴う(自己に誠実であるべきだという規範)。ここから「人は真の自己に即して、自己の人生設計の実現のために生きるべきであり、客観的な規範に常に従って生きる生は欺瞞的である」という(バナード・ウィリアムズ的な)主張が導かれることになる。

客観説的な解決、つまりカント主義的義務論及び強い功利主義が胡散臭く感じられるのは、このような「解決」にある種の自己欺瞞が感じられるからであろう<sup>10)</sup>。この自己欺瞞とは、人が自己に誠実であるならば道徳的な生、つまり客観的な規範に従う生を選ぶはずはない、ということである。

## 8. 主観的—客観的という二分法の問題点

自分の人生を肯定できることは人生の意味を「感じる」ための必要条件ではあるが、仮にマザー・テレサのように多大な社会的貢献をした人がそのような態度を持つことができないとしても、そのような人の人生には客観的にも「意味」が「ない」とは決して言えない。当然「自分の人生に倦んだマザー・テレサ」の生に客観的に「意味がない」と言うことはできない。「自分の人生に倦んだマザー・テレサ」は他人にとって重要な存在であり、世界に利益と効用とを生み出し、他者に教訓を与えているという点で、つまり先に挙げた8つの用法で言えば、(3)と(5-a)(5-b)と(6-a)の用法で「意味がある」。

ここでは本稿の始めで見たような「意味のある生」の「意味」の多義性について考慮する必要がある。「意味がある生」とは主観的には幸福や充実感を感じさせる生である（先の8つの用法の中では用法(1)）。しかし客観説的な立場では、「意味のある生」とは多くの効用を生み出す生であり、社会に変化をもたらす生である（用法(5)）。だが先に見たように「道徳的な生」と「意味のある生」の両者は必ずしも排他的なものではない。ピーター・シンガーは、道徳的に（功利主義的に）生きることは生に客観的な意味（用法(5)：あるいは行為の帰結としての他者へのプラスの影響、つまり他者の効用の増加）を与えると同時に、主観的な充実感（用法(1)）を与えとも考えている。

「生きる意味」を主観的に、自己の快樂の追求や、欲求の実現のみに求めるなら、そして感情としてのみ理解するなら、客観的な規範に従って生きることは、そのような快樂の追求や欲求の実現を捨てることを意味する。だがシンガーも「客観的な規範に従って生きるような生は実は主観的にも善き生で、人々はそこに満足を見出しうるのだ」と答えるだろう。

しかしこのようなシンガー的な路線では、例えば社会的に成功したトルストイを悩ませたような問い、つまり社会的に成功していても、あるいは道徳的に行為していてもつきまとう「真の人生」に関する問いに答えることはできない。つまり「自分の人生に倦んだマザー・テレサ」の悩みに答えることはできない。



そもそも「人生の意味」について語るときに「主観的」「客観的」という二分法を導入することは、議論をわかりやすいものにすると同時に、「人生」や「世界」といった概念を単純化する危険性を伴う。というのも「人生」は「自己」と、他者や自分をとりまく「世界」との間で生きられるものであり、主観的-心的-感情的なものにつきるものでも、客観的な価値につきるものでもない。また人生の価値も社会的なものにつきるわけではなく、それを自分とは切り離された利益や効用としてのみ捉えることにも問題がある。このような二分法では「自己への誠実さ」について十分捉えることができず、このような二分法が「自分の人生に倦んだマザー・テレサ」のような存在を生むことになる。ここで考えるべきことは「人生」と「世界」との関連である。この点についての詳しい考察については他日改めて試みたい。

本稿は科学研究費補助金（（基盤研究（B）（一般））課題番号 16H0333707 「人生の意味」に関する分析実存主義的研究と応用倫理学への実装」の研究成果の一部である）

## 注

- (1) 客観的な規範とは、功利原理のような形式的な規範を意味することも、「嘘をついてはならない」「約束を守らなければならない」「他者を暴力的に傷つけてはならない」といった具体的な規範を意味することもあるが、本稿の議論ではこの両者をともに客観的な規範として扱う。
- (2) Nagel より。ただし例は少し変えてある。
- (3) このような立場をメッツは「意味に関する功利主義的理論」と呼んでいる（T.Metz, p.187）。
- (4) ニーチェの「神の死」と、ニヒリズムとはこのような事態が全ヨーロッパ的に起こったことを意味している。
- (5) これはウィリアムズが 'Moral Luck' におけるゴーギャンの例などで問題にしていることである。
- (6) 「自分の人生に倦んだマザー・テレサ」は Metz が言及している例である（Metz, p.135）。
- (7) P. シンガー 邦訳 p.350。アーヴィング・シンガー p.7。

- (8) Nozick (1981), p.571: 邦訳 p.435. なおノージックは意味のある人生とは「人生を方向づけ統合する諸目標の計画や優先順位に従って組織された人生」、「自分の属性が備えるべきものと意図した一定の構造・型・細部を有している人生」等だと考えている (Nozick 1981, p.578: 邦訳 p.442)。
- (9) D.Benatar, *Human Predicament*, Oxford University Press, 2017, p.17.
- (10) この事例はジョナサン・グラバーが挙げている例を多少変えたものである。グラバー, p.188.
- (11) カミュ p.210-217
- (12) 毎日同じ仕事をこなす工場労働者の生はこれに近いということになる。
- (13) あるいはシーシュポスが岩を持ち上げた後で、岩を転げ落ちるのを見ることに大きな快感を覚えるなら、それにも「意味」があるということなるだろう。
- (14) この二分法は多くの場面で有効ではあるものの、議論を抽象的なものとしてしまう危険性がある。しばしば引用されるスーザン・ウルフの「意味は主観的魅力が客観的な魅力と合致するときに生じる」'Meaning arises when subjective attraction meets objective attractiveness' という語によって示される「ハイブリッド説」はこのような二分法の問題点を指摘したものである。
- (15) 「経験機械」(快楽機械) experience machine はロバート・ノージックがその著書『アナーキー・国家・ユートピア』で快楽主義の批判のために導入した思考実験のためのアイデアである。この機械に入れば、自分に快楽を与えてくれる夢を見ることができるとされている (Nozick 1974, p.42: 邦訳 p.67-68)。
- (16) J.L.Mackie, *Ethics: Inventing Right and Wrong*, Penguin Books (1991) (邦訳 マッキー、加藤尚武監訳『倫理学—道徳を創造する』哲書房, 1990)。
- (17) 以上の整理は Wiggins 1976 を参照にした。なお、ウィギンズはどちらかというとき非認知主義的な立場に傾いている。
- (18) ドイツの SF 小説シリーズ。2018 年 5 月時点でドイツ語版で 2962 巻、日本語版(早川文庫)で 569 巻(ドイツ語版の 1138 巻)まで刊行されている。
- (19) ここで考えられている人生の無意味さとは、ある種の疎外であると考えてよい。
- (20) 以上はピーター・シンガーの『私たちはどのように生きるべきか』の第 10 章及び第 11 章の要約である。
- (21) ここで「道徳的」という語によって、カント主義的に、あるいは指図主義的に何らかの規範に従うことを意味するのか、あるいは功利主義的に社会全体の効用の最大化をめざすのか、それとも徳倫理的に有徳な人になることを意味するのか、本来であればそのそれぞれに分けて議論する必要があるが、本稿ではそれらを区別することなく、議論を進める。
- (22) Nagel 1986 の第 10 章。ただしこの章では正しく生きること living right とよく生きること living well とが対比されており、この対比は本論で問題にする「客観的な規範に従って生きること」と「人生に意味があると感じながら生きること」と完全に重

なるわけではない。

- (23) カント的に客観的な規範に従って生きることと、多くの効用を生み出すこと（あるいは世界の中の苦痛をできるだけ減らそうとすること）とは基本的には異なる。客観的な規範に従って生きること（義務論的な生を生きること）は、利益や効用に関わるというよりも、主観的な（内的な・志向性に関わる）側面に関わるものでもある。だが本稿では議論をシンプルなものにするために、この両者について区別していない。
- (24) これは先に見た「人生の意味」の8つの用法のうち、(1)の「実感・充実感」を自分の個人的な欲求の満足に限定していることによる
- (25) シンガー自身はこのような自分の回答はフランクルの延長にあると考えている。『私たちはどのように生きるべきか』邦訳 p.376。
- (26) Tartaglia は、メッツが問題にしているのは人生の意味に関する social な意味だけだ、としている。Tartaglia, p.93 など。
- (27) この点については、コースガードのように「道徳的なアイデンティティ」を身につければ問題はない、という答え方も可能である。

## 文献リスト

- カミュ 清水徹訳『シーシュポスの神話』新潮文庫（2006 改版）
- ジョナサン・グラバー、加藤尚武監訳『未来世界の倫理—遺伝子工学とブレイン・コントロール』産業図書、1996
- アーヴィング・シンガー（1995）（工藤政司 訳）『人生の意味—価値の創造』法政大学出版社、1995
- Singer, Peter, *How Are We To Live*. Oxford University Press, 1997（ピーター・シンガー、山内友三郎監訳『私たちはどのように生きるべきか』ちくま学芸文庫、2013 [法律文化社、1999 年刊行のもの文庫化]）
- 村山達也（2017）「人生の意味の分析哲学」『現代思想』12 月臨時増刊号総特集「分析哲学」vol.45-21, pp.266-282
- 森岡正博（2017）「『人生の意味』の哲学」『現代思想』12 月臨時増刊号総特集「分析哲学」vol.45-21, pp.180-185
- Benatar, David, *Human Predicament*, Oxford University Press, 2017
- Mackie, J.L. *Ethics: Inventing Right and Wrong*, Penguin Books (1991)（邦訳 マッキー、加藤尚武監訳『倫理学—道徳を創造する』哲書房、1990）
- Metz, Thaddeus (2013) *Meaning in Life*, Oxford University Press
- Nagel, Thomas (1986) *The View from Nowhere*, Oxford University Press（邦訳、トマス・ネーゲル、中村昇他訳『どこでもないところからの眺め』春秋社 2009, 第 10 章）
- Nozick, Robert (1974) *Anarchy, State, and Utopia*, Basic Books（邦訳、ロバート・ノージック、島津格訳『アナーキー・国家・ユートピア』木鐸社、1992）

- Nozick, Robert (1981) *Philosophical Explanations*, Harvard University Press (邦訳、ロバート・ノージック、坂本百大監訳『考えることを考える』(上・下) 青土社, 1997 : 引用はいずれも下巻から)
- Tartaglia, James (2015) "Metz's Quest for the Holy Grail", *Journal of Philosophy of Life*, vol.5, No.3 (October 2015) : 90-111
- Taylor, Richard (2000) *Good and Evil*, Prometheus Books (オリジナル版の出版は1970)
- Wiggins, David (1976) "Truth, Invention, and the Meaning of Life" (in his *Needs, Values, Truth* (Third Edition) 1998, Oxford University Press) (邦訳 デイヴィッド・ウィギンズ、古田徹也訳「真理・発明・人生の意味」 大庭健・奥田太郎 編・監訳『ニーズ・価値・真理』勁草書房 2014, pp.139-232)
- Williams, Bernard (1981) *Moral Luck*, Cambridge University Press (邦訳 バーナード・ウィリアムズ、伊勢田哲治監訳『道徳的な運』勁草書房 2019)